

時半に下關へ着きすぐ身延へ向つた。

## 近 况 十 首

山深かき冬の夜こそ悲しけれすぎきしわれの省みられて

山寺の鐘の音空にひびくらし山の端出づる夕月ふるふ

唯一人野に立ち出でて思ふまゝ泣きてもみたきわが心かな

やるせなき心抱きて夏の夕べ暮れゆく丘に口笛ふきぬ

ゆく春の岡べの道を歩みつゝ幼き兒等の草笛きくも

草にねてしみく仰ぐ空の色藍ふかふして心なごめり

水すめる川のほとりの草にねて瀬の音かそけく心にきこゆ

雨去りて群がる雲のひまゝに青き色見る心うれしき

梅雨霽れの明るきひるの大空を白雲流る脚連ねして

黒 崎 與 志 雄

人をさけ山里歩くこの頃の我はも淋し友あらなくて

琵琶歌

悲曲  
『涙の光』

帝都に近き片田舎

柱傾き壁落ちて

寢床に眺む月も亦

春は観花の樂みも

夏の緑りの滴たりも

秋風野邊に立ち初めて

冬の寒さも厭はれず

可細き腕の乙女子よ

花の盛りも早や過ぎん

見るもいぶせき賤が家に

鳴く虫の音は哀れなり

雨の漏るゝも何かせん

知らずに過す乙女子よ

流汗瀧の苦みも

月の眺めも涙そふ

雪に轉びつ日を送る

めぐりくゝて小車の

五ツ年せ前に父上は

吉田孝秀